赤羽別院報 第35号
発行所
真宗大谷派
赤羽別院 親宣寺
〒444-0427
愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
Tel・Fax（0563）72－2308
Eメール
akabane_betuin@katch.ne.jp

葬儀から教えられること

現代は、葬儀に限らず仏事の意味が全く伝えられていない事態が進行しています。

葬式仏教ともいわれていますが、それでも通夜に始まる葬儀式が市民の仏教にふれる機会であるにも拘わらず、その現場が仏事の場になっていません。

世の中が生者の視点（損か得か）でのみ、全てが取り仕切られていくなかで、葬儀もそのような視点にさらされています。

今から十数年前のことですが、検事総長もされた伊藤栄樹氏が「人間、死ねばゴミになる」と。この発言に対し、ガンを患いやがて亡くなった鈴木章子さんが「人間死ねばゴミになるのですか、あなたは子どもさんにゴミを拝ませるのですか？大変無残ですね」といっておられます。

清め塩

真宗の葬儀では清め塩は使いません。それは明治の仏教者・清沢満之先生の言葉に「生のみが我等にあらず、死もまた我等なり。我等は生死を併有するものなり」とありますが、いのちの有り様をきちっとおさえて下さっています。

これはお釈迦さまのおさとりの内容です。お釈迦さまはおさとりになった時「不死を得た」と宣言されたといわれており、人の死は悲しいことではあるけれども、穢れたことではないということです。

この宣言から三つのポイントがあげられます。

一、葬儀の会葬者は、穢れたものに向かって合掌するのか。

二、親も亡くなれば穢れたものということか。

三、さて、生れたものは必ず死にます。時期は決っていませんが。そして、私たちは、現在を生きるものですが、未来をも生きているのです。その未来が穢れである死に向かって生きるとすれば、人生を実りあるものとして生きることが出来るでしょうか。

残された私どもは、人の死という事実からどういうメッセージを頂いていくのか、それが解らなくなったということが、葬儀の清め塩に象徴されているようです。

光と闇

十九才の息子さんを亡くしたお父さんが、葬儀のお礼の挨拶で一言「息子は宝ものでした」と言われました。

実は、念仏の教えを聞いてきた先達は「親に先立つ子は善知識」という言葉を残しています。子どもさんを亡くされた親は深い悲しみを背負っています。その悲しみに寄り添う言葉こそ「親に先立つ子は善知識」なのです。

ここに、杉山平一氏の「生」という題の詩があります。

ものを取りに部屋へ入って
何を取りにきたかを忘れて
戻ることがある
戻る途中で
ハタと思い出すことがある
その時は　すばらしい

身体が先に　この世へ
出てきてしまったのである
その用事は何であったのか
いつの日か思い当るときの
ある人は幸福である
思い出せぬまま
僕はすごすごあの世へ戻る

本当に、生きているということは「身体が先に　この世へ　出てきてしまった」のです。普段は、死を考えないようにしていますが「お父さん、いのちあるものは全て死ぬのです」と、我が子が身をもって問いかけてくれているということでしょう。

仏教を聞いてきた人が亡くなった方を「仏さん」即ち「目覚めた方」として拝んできたのは、亡くなった方から「あなたは、もう人間に生れた課題が明らかになりましたか」と問われていることであったとの、気付きがおこったことに対する驚きを指すのです。

当たり前

しかし、現に目の前に元気な息子がいて「お前は宝物だ」とはなかなか言えません。勿論、なかなか褒めるということも出来ないでしょう。ここが、本当に悲しいことだと仏の目には映るのです。これが、人間の根っ子の問題です。

東日本大震災のあと、福島の村民がラジオのインタビューで「失ってみなければ、日ごろの暮らしの有り難さはわからないと思います」と応えられました。この言葉が、先のお父さんの言葉と通底し共鳴していると思います。

日頃の暮らしが「有ることは難い」と言われているのです。これが「有ること難い」即ち、「奇跡」ということです。

今、私たちに奇跡が起っているのですが、それが解らないのです。どうでしょうか。つまり、私たちは鈍感になっているのです。成ってみれば全て当たり前なのです。

例えば、医学の進歩で我が国は超高齢化社会と言われています。しかし、これは必ずしも喜ぶべきこととしては受け止めてはいないようです。世界的にも最速で長寿社会になったのですが、これも成ってみれば当たり前、つまり喜びは長くは続きませんでした。

愚

この私たちは、奇跡が起きていてもそれが当たり前としか受け止められない事実を、親鸞聖人は深い悲しみをもって、愚（愚かな）者・凡夫と自らを受け止めておられます。

結局、私どもは自分がどうなりたいのか、どうなったら自分を丸ごと受け止めていけるのか解らないのです。

空しいということ、花が咲いても実らないということでしょう。

いのちをいただいて生きているのにも拘らずそのいのちを私有化して、いのちが貴いとは如何なることか、尋ねようとしてこなかった、そのつけがきているのでしょう。

葬儀は最高の文化

一九五〇年代に北イラクのシャニダール洞窟で、およそ3万年前の地層から、ネアンデルタール人の次に地上を支配した原人類が、葬儀をしていた遺跡が発見されたのです。

花などが存在しえない奥深い洞窟の地層から、弔って手向けたであろう花の種が残されていたのです。そうすると失礼かも知れませんが、私たちは原人類である3万年前の先祖より退化してるのかもしれないのです。

「死もまた我等なり」と死を排除せず「生死するいのち」と、いのちの中にきちっと死を位置づけていくことが、今、葬儀執行者としての仏教者（特に僧侶）には何よりも求められているといえます。何故なら、葬儀の意味が回復されてこそ、本来の意味での人間性を回復する第一歩が始まる時であると思われるからです。

ある人類学の先生は、人間の持っている文化のなかで葬儀が最高の文化であるとおっしゃっています。

つまり、人が亡くなったら葬儀をするということは、人間である証拠なんです。それが今日では、葬儀に対する費用など考え方の変化により簡素化されつつあります。これは、人間が人間でなくなるということではないでしょうか。

平成25年2月16日
第14組壮年対象真宗講座
渡邊晃純師講話要旨

■講師プロフィール
渡邊　晃純（わたなべ　こうじゅん）
1940（昭和15）年生まれ
大谷大学大学院
真宗学専攻・博士課程　満期退学
元　岡崎教務所長
元　三河別院輪番
現　岡崎教区中央教化センター主幹
現　豊田市・守綱寺住職

別院行事のご案内

声明研鑽会（しょうみょうけんさんかい）
7月4日（木）・8月1日（木）・9月5日（木）
10月3日（木）・11月7日（木）　各日午後7時

夏の御文（げのおふみ）
7月15日（月）午前10時・午後1時
法話　第6組　専覚寺　楠　理見師

赤羽別院崇敬区域世話方会
7月15日（月）午後3時

音楽法話・みどうコンサート
7月15日（月）午後4時
弾き語り　第11組　善福寺　山背　隆文師
詳細4ページを参照

暁天講座（ぎょうてんこうざ）
8月25日（日）午前6時
講師　第7組　浄専寺　安藤　弥師
8月26日（月）午前6時
講師　第18組　福万寺　戸松　憲仁師

秋季彼岸会（しゅうきひがんえ）
9月22日（日）午後1時
法話　第11組　浄徳寺　太藤　順世師
9月23日（月）午後1時
法話　第20組　浄教寺　鈴木　量応師
9月24日（火）午後1時
法話　第10組　厳西寺　藤原　肇師

報恩講（ほうおんこう）
10月14日（月）
初逮夜　午後1時
法話　第15組　明水寺　鈴木　聡師
10月15日（火）
日中　午前10時
逮夜　午後1時
法話　加賀市　光闡坊住持　佐野　明弘師
10月16日（水）
結願晨朝　午前10時
結願日中　午後1時
法話　第17組　西岸寺　松林　了師

晨朝法話（じんじょうほうわ）午前7時
7月13日（土）　第9組　福泉寺　木村　圭師
7月28日（日）　同　祐正寺　中村　祐介師
8月13日（火）　第10組　明泉寺　御館　健師
8月28日（水）　同　蓮正寺　稲垣　智師
9月13日（金）　第11組　常照寺　山下　正文師
9月28日（土）　同　唯信寺　大河内和也師

— 一年に一度は赤羽別院へ —

23名が仏弟子の仲間入り
帰敬式を執行

花冷えする4月11日、赤羽別院では今年も新たに23名もの方々が、帰敬式を受式されました。それは「おかみそり」と呼ばれ親しまれてきた儀式です。

仏弟子としての名告りである法名をいただき、自らの事実の自覚にたち、お法を依り処とする生活を賜るのです。

お剃刀のようす

背筋をピンと伸ばし、揃いの肩衣を身に着け、少し緊張気味な面持ちで合掌される姿とそれを見守る皆さん、お互いに新学期を迎えた一年生みたいな気持でありました。

鍵役・信悟院殿ご執行のもと、厳粛に剃刀の儀が始まり、三帰依文をいただき、合掌の姿のまま「おかみそり」を受けられました。

その後の法名伝達では、一人ひとりに「おめでとうございます」と声をかけ、歩みが困難な方には自ら歩を進めて全ての方に手渡されました。

執行のお詞では「仏弟子になるということは、三宝に帰依し、み教えに照らされた真の道を歩んでいくということ。いよいよ、御同朋・御同行の交りを深め、自らの人生をあげて、念仏の教えを聞き伝えていかれますように」と添えられました。

お釈迦さまは、人生の真実を求めて「南無阿弥陀仏の教え」に出遇われ、その教えにより、人間の生まれた意義と生きる喜びに目覚めることこそ大切であると説かれました。

私たちの生活に具体的にはたらく姿が「仏・法・僧」即ち、三宝なのです。

真実に目覚めた人（お釈迦さま・諸仏）が仏。南無阿弥陀仏の言葉にまでなって下さったのが法。その南無阿弥陀仏で結ばれた人々の集まりが僧。この三宝を依り処として、人生を歩むことを誓う決断の儀式が帰敬式なのです。

受式者を代表して、鈴木敏秋氏（釈慧敏）が誓いの言葉で「あらたな自覚に立って、朝夕のおつとめ・聞法を生活の基本とする」と誓われた。

あら・た（新た）を改（あらた）と受けとるのは、私だけであろうか。

受式者誓いのことば

佐野明弘師の法話
報徳会を厳修

本年の報徳会は、帰敬式と同日の4月11日午後、本山鍵役・信悟院殿御参修のもとに厳修された。

内陣・外陣の僧侶と満堂の参拝者が一体の充実した勤行の後、この日帰敬式を受式された第14組専興寺門徒・市古房喜氏より感話をいただいた。

法話には、石川県加賀市の光闡坊住持・佐野明弘師をお迎えし、一同が熱心にメモをとりながらの聴聞となった。

師は「人間の迷いが尽きないから、今日まで面々と仏法が続いてきたのです。時代や生活形態が変っても、そこに苦悩するものが絶えることはない。苦悩・悲しみを抱えたものに仏の大悲のことばが聞かれてきたのです。自分の人生を豊かにするために仏法を取り入れてきたのではない。いのち・生きることの全てが問われ、うなずいてきた深い歴史がある」と。

佐野明弘師の法話

また、ご自身のことについて「仏門に入れば確かな依り処を求めて生きることができると思い、はじめは禅宗で修行に励んだが、なかなか自分の居場所が見つからずに苦しんだ末に、思うところに従い真宗大谷派の僧侶になった」と自らの体験を話された。

『帰依するということは、自分を受け入れて待っていてくれる処があることです。皆さんは帰る場所がありますか。「行ってらっしゃい」のらっしゃいは「待っているよ」という意味です。だから「ただいま」と帰れるのです』と。

時折、笑みを浮かべながらも、常にお聖教に問い尋ね、確かめていく真摯な姿がとても印象に残る法話であった。

南無阿弥陀仏

福島のみんな！遊びにおいでん！
第14組・報恩寺にホームステイ

福島原子力発電所事故に伴なう放射線への不安から、福島では育ち盛りの子ども達が屋外で遊びにくい状況が続き、運動不足やストレスの蓄積は深刻な社会問題である。

岡崎教区では、春休みを利用して福島・茨城の子供とその家族をお招きし、教区内の7ヶ寺がホームステイ先として受入れを行い、貴重な時間を共有することができた。

岡崎教区では「あそびにおいでん！プロジェクトin愛知実行委員会」の協力のもと、3月25日から7日間「福島の子どもたち！岡崎教区へ遊びにおいでん！プロジェクト」と銘打ち、福島県の10家族と茨城県の1家族、併せて11家族33名を愛知県にお招きした。

子ども達には自由な遊び時間を、家族にも放射線被爆を気遣うことなく保養し、安らかな時間を過ごしていただくことを目的としたものである。

一週間の主な行程として、岡崎城等市内の散策や教務所ホールでのレクレーション・念珠作り、三河別院の花まつり参加、窯焼きのピザ作りや演奏会等を楽しみ、この間の3日間のホームステイでは教区内の7ヶ寺に分宿し、愛知県の家族との交流を深めた。

石松家と報恩寺の皆さん

赤羽別院崇敬区内では、第14組報恩寺（住職石川勇吉師）に郡山市在住の石松幸さん・春には小学4年生になる大朗君・入学を迎える栞ちゃんの母子3人が訪れた。

幸さんは「原発事故の前と後では、食事・外出・学校行事をはじめ、ありとあらゆる事に異変が生じ、人間関係にも変化を余儀なくされている」と話された。

このように話される幸さんの側で、普段活動を制限されている純心な二人の子どもさんが、喜々としてはしゃぎまわる姿が印象的であった。

ご縁起キャラと遊ぶ

報恩寺での3日間には、住職夫妻の案内で、明石公園・新美南吉記念館や名古屋港水族館等を訪れ、思いっきり羽を伸ばして愛知を満喫した。

二人の子どもさんは、とても活気に溢れており、このような子ども達が満足に屋外で遊ぶことがままならないとなれば、子どもに限らず保護者の心労も並大抵ではない。

過去には、チェルノブイリ原発の爆発事故の例もあり、二十七年余り経過した今日でも人が安心して住むことのできない荒地と化したままである。この状況が永く続けば福島だけが日本から取り残されてしまう。震災復興予算の使途に疑義が生じているが、適格な執行により放射能の早期除染と、事故の再発防止対策が強く望まれるところである。

3月20～22日の3日間
春季彼岸会厳修

寒さの厳しかった冬が去り、境内の早咲きの桜が満開となった3月20日から3日間、赤羽別院では春季彼岸会が厳修されました。

法話は、初日に第7組等周寺天野美津子師が女性らしい優しい視点で、二日目は同組心城寺天野義敬師から、本願寺第12代門首教如上人による東本願寺創立・真宗大谷派設立の経緯を、三日目には第10組蓮正寺稲垣智師が、大きな体に大きな声で仏法を説かれました。

天野美津子師の法話

念仏が私たちの生活の中に広まってから約八百年が経ちます。ご先祖さまは、時に命をかけて各地に念仏の道場を残してくださり今日に到っています。

現在は、過去の積み重ねであり、過去を粗末にすることは今を粗末にすることです。温故知新を改めて感じることが出来るのがお彼岸であります。

熱心な聴聞者夫妻

岡崎教区・同朋の会を推進する会
ご一行22名がご来院

去る5月17日、岡崎教区の「同朋の会を推進する会」が実施した学習会「親鸞教室」に参加した22名の皆さんが、碧南市の西方寺・清沢満之記念館で学んだ後、赤羽別院に来院された。

ご一行は、御本尊前で嘆仏偈をお勤めされ、これに次いで輪番より当別院の歴史や赤羽別院教化センターの設立経緯等をはじめ、年間を通して取組む事業内容の説明と併せて、今後の課題などが紹介された。

西方寺・清沢満之師で思い起こすことといえば、師の「建物・組織が大谷派なのではない。なぜ場を大切にするのかを確かめていかなければ権威になる」との言葉であり、また、浄土和讃に記されている「方便としての浄土が講堂道場である」について「講堂道場はここに教えがあると示す拠であり、その教えを学ぶ姿が教化となり、社会が開かれていく」との親鸞聖人の教えを改めて認識するところであった。

皆さま方は、輪番の「一人でも多くの念仏者を生み出して・・・、真宗の法義相続と、別院・教化センターの護持を篤く願うところです」の言葉の一つひとつに深く頷いておみえであった。

真宗本廟・東本願寺
教如上人四百回忌法要厳修

念仏のみ教えを護るため、織田信長や豊臣秀吉と渡り合い、遂には、徳川家康を味方につけ、本願寺の東西分派と真宗大谷派誕生の立役者として強く生き抜かれた、教如上人の四百回忌法要が厳修された。

真宗本廟では、4月1日から6日までの春の法要期間中、2～4日までの3日間、親鸞聖人がいただかれた念仏の教えを今に伝えて下さった、教如上人への報恩謝徳の四百回忌法要が厳修された。

御影堂には、上人に深く帰依していった全国各地からのお詣りの方々に交わり、岡崎教区からも団体参拝を含め多くの門信徒がかけつけ、一昨年の聖人七五〇回御遠忌法要を彷彿させるが如き賑わいを見せた。

初日の4月2日には、白州において大垣教区の方々により、顕如・教如両上人の御苦労を慰め、自分たちの信仰が護られた喜びを表したと伝えられる「顕教おどり」が披露された。

御影堂内では、赤羽崇敬区第14組蓮成寺住職・青木馨師による「上人の教化と本願寺の再興について」と題し記念法話が行われた。

続いての音楽法要では、法要儀式作法に則り、合唱団二三八名全員が輪袈裟・肩衣を着用して、声明方や参詣者と共に「和訳正信偈」を歌い上げ、その声が満堂に響きわたった。

結願日中では稚児が参堂列（縁儀）に加わり、大寝殿～高廊下～御影堂へと進み法要に華を添えた。

期間中、阿弥陀堂特設会場において、全国各地から寄せられた上人ゆかりの品々90点を展示する「教如上人展」が催され、上人の生涯と東本願寺創立の歴史にふれることができた。

お寺さん入堂

お稚児さん入堂

教如上人四百回忌法要にお出合いして

去る4月4日、岡崎教区第9組の教如上人四百回忌法要団体参拝にご縁をいただき、早朝より本山に上山させていただくことができました。

御影堂では、午前9時半から稚児行列が行われ、お寺さん・雅楽僧・稚児たちの長い列が入堂しました。子どもたちには、生涯忘れることのない思い出となるでしょう。

堂内に溢れる程の大勢の方たちと一緒にお参りの後、渉成園で由緒ある茶懐石の粥膳をいただき、あまりの美味しさにお代りをさせていただく程で、今も絞付袴姿やその情景が懐しく思い出されます。

参拝の記念にいただいたお品は、東本願寺創立時の遺品である梵鐘の図柄入りで嬉しい逸品です。

真宗門徒でありながら、東本願寺の創立者が教如上人であることも知らずに今日に至り、恥ずかしい思いですが、今回有り難いご縁にお出合いすることができ、いろいろ勉強にもなりました。

帰りには、枝垂れ紅小桜が満開の二条城を散策し、その美しさを満喫することができました。

楽しい旅の思い出を紡ぐ一日となり有難うございました。

第9組・祐正寺門徒　山本はるゑ

崇敬寺院における
宗祖親鸞聖人750回御遠忌

本堂等御修復落慶法要 記念音楽法要と併せて

第11組 崇敬寺

桜花爛漫の3月30・31の両日、第11組正念寺では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌及び本堂等御修復落慶法要が厳修されました。

30日の落慶法要は、築三百年余の本堂の修復を始め、客殿・山門の新築等足掛4年に及ぶ伽藍整備の完了を記念するものであります。

31日には、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に併せ、記念音楽法要が営まれました。

音楽法要では、小学生代表4名による仏前に蝋燭とお華をお供えする「供灯・供華」の後、正念寺合唱団31名と小学生23名で構成する子ども正信偈隊が、大勢の参拝者と共に「正信偈同朋奉讃」のお勤めと仏教讃歌を合唱しました。

子ども達は馴れない声明と仏教讃歌で緊張の面持ちでしたが、両日にわたる稚児参堂列とともに記念すべき法要に華を添えました。

境内には屋台店が並び、庫裏にはお茶処である西野町地区のお寺に相応しいお茶席が設けられ、参拝の方々の語らいの場となっていました。

大人と子供の合唱

真宗同朋の集い

第13組・教化委員会

「過去を振り返って悔いを残し、未来に不安を感じ、現在どこかに空しさを感ずることの多い現代を生きる」私たちですが、この現状を超えて生きる道を「親鸞聖人やお釈迦さまに尋ねる」ことから始めましょうと、第13組教化委員会では長寿寺を皮切りに、明栄寺・良宣寺・養林寺と会場を移し、全4回の「真宗同朋の集い」が開催された。

第一回の長寿寺では去る2月3日、准堂衆・名古屋教区第22組法龍寺住職堀田紀継師をお招きし「真宗のお勤め」をテーマにして進められた。

永年の叡山修行の後、京都・吉水に法然上人を尋ね、後に浄土真宗の開祖となられた親鸞聖人や御文を顕し民衆と親しく接することで、停滞していた真宗の中興の祖と敬われる蓮如上人の生涯について話された。

この後、お勤めの心得に触れ「一声・二章（ふし）・三拍子」即ち、一にはっきりと声を出し、二に節に合わせて上げ下げし、三に早さを合わせ、皆で和してお勤めすることと解かれた。

普段、何気なくお勤め唱和している御経・偈文（正信偈）・念仏・和讃・回向・御文等お勤めの構成とその読み方・称え方の解説は、これまで拝聴することがなかった有りがたい内容で、まさに目から鱗が落ちる感であった。

満堂の聴聞者の頷く姿を見るにつけ、真宗の原点回帰が求められている今日に相応しい法会であった。

堀田紀継師の講話

一年に一度は赤羽別院へ

蓮如上人五百回御遠忌法要 庫裡落慶法要と併せて

第10組 厳西寺

4月27・28日の両日、第10組厳西寺では、蓮如上人五百回・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要と併せて庫裡の新築落慶法要が賑々しく執行された。

27日は、午前中に庫裡落慶法要、午後には蓮如上人五百回御遠忌法要が営まれ、参拝者は厳西寺とは縁の深い同組蓮正寺住職・稲垣智師の法話を拝聴した。

28日には、午前・午後に亘り宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が、宿縁寺楽僧の奏でる雅楽とともに厳修され、第14組蓮成寺住職・青木馨師の法話があった。

この間に、三百名を超す子供が参加して稚児行列が行われ、爽やかな五月晴れの下で保護者共々笑顔がいっぱいの行列となった。

住職がおっしゃるに「この厳西寺は雨の厳西寺といって、大きな行事の時になると雨が降ることが多かった。それならばと、以前に法要の引き出物に傘をお付けしたところ、それ以降は雨が降らなくなったんだ」とのことで、この日の空模様の如き晴れやかな笑顔を見せていただけた。

稲垣 智師の法話

神社仏閣・墓石・石積・石加工
設計施工全般
杉新石材店
〒444-0324
愛知県西尾市寺津町南若王子45
北若王子
TEL・FAX〈0563〉59-4105

御本山　御用達
営業品目　法衣・打敷・御幕・念珠・貸稚児衣裳
（株）平安法衣店
御本山へ参拝、納骨の際には是非お立ち寄りください。
〒600-8153
京都市下京区東本願寺大門前
TEL（075）351－3681㈹
FAX（075）351－5563

■■■カルチャーウォーク・その14■■■

東三河の聞法道場
豊橋市花園町 豊橋別院を訪ねる

温暖な気候と風土に恵まれた渥美半島の付け根に位置し、東海道・吉田宿の城下町として栄えた豊橋は東三河の中核都市である。教如上人との縁りが深い豊橋別院を訪ねたのは、散り始めの桜の花びらが舞う四月の穏やかな日であった。星津輪番・柴田列座両師から話を伺った。

三河における浄土真宗は、十三世紀中頃に関東から伝わり、矢作川流域に広がっていった。三河三ヶ寺をはじめ多くの末寺門徒は、西三河を中心に尾張・美濃・伊勢へと拡大したが、その要因のひとつに蓮如上人の教化と、上宮寺の佐々木如光の存在が大きいとされている。

一方、東三河一帯は寺領や神領が混在し、様々な規制が有力末寺や近在の名主らにかけられていたこともあり、互いの連携・結束に手間どり伝承が遅れたのではないかと考えられる。

豊橋別院本堂

それでも、この地域には古くから吉田と野田に道場があり、吉田道場が後に吉田御坊となったといわれている。その後一五三四（天文三）年、本願寺証如上人のとき、吉田御坊は惣道場となり、寺号誓念寺と称したのは文禄年間で、教如上人の時と推測される。

この惣道場・吉田御坊が現在の豊橋別院である。

吉田御坊と教如上人との関係は、慶長年間に上人三度の関東下向の都度、吉田宿の御坊に立ち寄られ旅程の中継地役を担ったものと考えられる。

また、吉田御坊を語るに忘れてならないのが、正琳寺・應通寺・仁長寺・浄圓寺・蓮泉寺五ヶ寺の存在である。長年に亘り住職・門徒が御坊の御堂衆役として支えてきた。

明治十二年、吉田御坊から豊橋別院となり、それまでの五ヶ寺制度は廃止されたが、今も日曜講和の担当は、五ヶ寺を含めた市内七ヶ寺が持ち回りで勤めている。

崇敬区域は、東三河地域の三ヶ組・三十五ヶ寺となっている。

また、別院では直参門徒約二百五十軒をお預かりするなかで、婦人会や世話方会が別院の護持運営に格別の協力をしており、二〇一五年四月には宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を厳修する予定となっている。現在、法要の準備と併せて、東三河地域教化センター設立に向けての協議を重ねているところである。

星津輪番は「別院教化の在り方を考える意味でも、この法要を円成させたい。儀式作法の見直しを含め、特に若い人の意見を集約して活かしていければいい」と篤い思いを語られた。

※ 豊橋別院史より一部抜粋

エッセイ 続・赤い羽根の青い鳥

第一回

「再出発？それともリセット？」

チルチルとミチルは、苦労して見つけた「幸せの青い鳥」に逃げられ、そこで物語は終る。その後の彼等はどんな人生を送ったんだろう。青い鳥に逃げられたショックを乗り越えて再出発できたんだろうか…。

コンピューターゲームなどの影響かもしれないが、最近は「再出発」と似たような意味で「リセット」という表現をよく耳にする。でも、この二つの言葉は意味合いが随分違うような気がする。「リセット」という表現には、今までのいろんな出来事を「なかったこと」にして、白紙の状態からやり直すようなニュアンスを感じるのは私だけだろうか。

確かに、辛い経験をした人が「一度リセットしないと前に進めない」と感じるのは無理からぬことで、時間の経過や忘却ということが、時として人間を立ち直らせるきっかけになるのは事実だと思う。でも、自分の過去の経験を「なかったこと」にするなんて、本当に出来るんだろうか。だって、そういう経験も全てまるごと含めて出来上がった存在がこの私なんだから。

「人間は塗り箸と同じで、悩みや苦しみが塗り重ねられて綺麗な模様になる。」数年前のドラマ「ちりとてちん」で、塗り箸職人が語った名セリフである。苦しみや悲しみがその人の人間味となって積み重ねられていくということなんだろう。

ところで、このエッセイは上手く「再出発」できるんだろうか。それとも、やっぱり「リセット」したほうがいいですか？（K）

ご存知ですか？ その2 赤羽別院の阿弥陀如来像

赤羽別院では、昭和34年愛知県を襲った伊勢湾台風により本堂が倒壊し、ご本尊の阿弥陀如来像は、安全な処へお移しする間もなく瓦礫の下敷となった。

当時のようすを、門前で仏壇店を営まれる吉崎節子さんよりお伺いした。

本堂が倒壊した事に気が付いたのは翌日の朝でした。正面14間・側面13間の巨大な伽藍だったので、かなり大きな音がしたはずですが、全く気が付かない程の激しい暴風雨でした。

早速、別院関係者と瓦礫の中で御本尊を探しました。お身（からだ）には相当の損傷がみられ、全てを探し出すのに必死の思いでしたが、お顔は綺麗なまま残されており、その時の感激は今でもはっきりと思い出されます。

とりあえず、主人との共同作業で復元したうえで、仏師による本格的なご修復を経て、歴史ある御本尊・阿弥陀如来像を、無事に元のお姿にお戻しすることができたのです。

懐かしそうに話す吉崎さん

真宗講座 正信偈に学ぶ

昨年から6回連続の大谷大学名誉教授・古田和弘師による「真宗講座・正信偈に学ぶ」は、去る3月26日に満堂のお御堂において開催された。

第1回の「帰命無量寿如来」に始まり、今回の「明如来本誓応機」に到るまで、正信偈の言葉の一つ一つを真向きにお解き下さるなかで、師の誠実なお人柄からは不似合いとも思える、ユーモアとジョークが折々に飛び出し、思わず含み笑いしながらの聴聞となり、堅苦しい話にも拘らず、時間の経過を忘れさせてくれる講座である。

回を重ねる毎に、真剣な表情でメモを取りながらの聴聞者が増えている。

メモをとりながら聴聞

真宗門徒にとって最も身近なお聖教である、正信偈の意味を解説していただける本講座は、新年度も引続いて開催が予定されている。

♫音楽法話！みどうコンサート

別院のお御堂で、年間数回のコンサートを開催予定です。気軽にご参加下さい。

第1回みどうコンサート
ギターの弾き語りと法話
山背隆文師（善福寺住職）

日　時　7月15日（月）
　　午後4時～5時
場　所　赤羽別院　お御堂
参加費　無料

次回予告！
二胡で聞く恩徳讃
地元の二胡（胡弓）奏者をお招きする予定です。
おたのしみに！

第4回 御坊俳壇・川柳

選者　三浦　貞葉氏他

俳句（順不同）

九十を　忘れて拾ふ　年の豆　　蓮沼たけし
鯉の陣　くずれし水面　飛花落花　　犬塚　房江
赤羽院　屋根よりこぼる　恋雀　　渡辺よねこ
手捻りの　志野の小鉢に　木の芽和　　鎌田　晴枝
田植機が　残せし隅の　ひと仕事　　杉浦　洋子
菩提樹の　若葉天地に　澄みわたる　　鈴木いはほ
南無南無と　拝むで土筆　食べにけり　　安藤　明女
法を説く　剃髪僧侶や　春法会　　新家ゆり子
養花天　仰ぐ御坊の　解脱門　　石橋　行子
み仏は　微光たたえて　青葉風　　小笠原幸雄

川柳（順不同）

炎天下　仕事より辛い　嫁探し　　井上　啓子
又負けた　隣は六匹　鯉のぼり　　大渓　美恵
本尊に　両手合わせて　落語会　　濱嶋　君江

次回応募締切り　8月10日です

編集室

本紙一面の講話記事に「当たり前」ということについて記述があります。

私たちは、普段の生活が便利になり、医療技術や衛生管理が進歩して長生きできるようになっても、それが当たり前となってしまい満足することはありません。

それどころか、その日一日を暮らせる喜びが「有ること難い」と思うことすらなくなってしまったのではないかといわれています。自身の姿を言われているようで耳の痛い思いです。

便利や快適なことは全て当たり前のこととしてしまう一方で、不都合なことは当たり前として受け止めることができない自分がいます。病むこと、老いること、死ぬこと、どれもが当たり前のことですが、それが当たり前になっていない己の姿に気付かせていただきました。

4月より、新たに編集スタッフとして第11組浄徳寺若坊守で別院列座見習・太藤裕子師が加わりました。

広報部では、一層充実した紙面をお届けできるよう、全力で努めて参ります。皆さま方の一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げる次第です。

お寺の掲示板

一怒一老
一笑一少
怒ると老いるが
笑えば若返る
第12組了願寺

赤羽御坊新聞御懇志

・安楽寺様
・厳西寺同行中様

貴重なご懇志を有難うございました。

御寄付戴けませんか…。

赤羽別院の庫裏で使用する「花瓶」が老朽化し、使用に耐えません。

何方か、使用していない花瓶を御寄付戴けると有り難いのですが・・・。サイズは直径5.5～6寸位です。

御一報下さい。お待ちしています。